

半 丈 記

永井 規男

近頃—といってももう数年にはなるが—しゃがむか、坐りこむかしている若者を市中でよくみかける。近ごろの老高年層が、やせ我慢もあるだろうが、しゃがむことを止めたのと反対である。わたしはしゃがんでいるのをシット・ダウン族、坐りこんでいるのをヒップ・ダウン族とひそかに呼んでいる。これらダウン族は大学のキャンパス内にも進出してきていて、講義棟の廊下にまで出現する。かれらのシット・ダウンには、受講を拒否するといった罷業の意味はないらしく、迫力があるわけではない。けれども講義に行くときの邪魔になるので、「シッ」とか「シット」とかいいたくなる。虫の居所が悪いときは、投げ出した足をけとばして行く。

はてさて如何なる時世ならんやと嘆くうち、徒然なるままに引っ張り出して再読していた牟田口義郎氏の『旅のアラベスク』なる本で面白い一文を読んだ。「しゃがみ」の美学という題で、世界各地で見た日本人がよくしゃがんでいたという思い出から発して、「しゃがむ」という動作はアラブ人を含めてのアジア人の特性であるというのだ。力士がする蹲居もまた「しゃがむ」に由来し、それを美化したものだという。

そういわれてみれば、しゃがむのは一時代前までは普通の行為であった。おじさんが、道端にしゃがみこんで一休みしながら煙管で一服なんてのは日常茶飯の光景であった。吸殻を掌の上にポンとあける手際によさに見とれ、熱くはないのかしらん、大人になったら真似してやろう—などと思ったものだ。わたし自身でも、子供のころは、台所の板間にしゃがみこんで、ご飯を炊くカマドの火の番をしたものだった。後年、古い民家建築を調べるようになって、江戸時代中期以前ころは、台所の「流し」は低く設置されており、そのころの人はしゃがんで洗い流しの作業をやっていたことを知った。洗濯は洗濯機が普及するまでしゃがんでしていた。このように、わたしの親の世代くらいまでは、休むのも働くのも「しゃがみ」の姿勢をとることが多かったのだ。

坐りもまたアジア的姿勢であることは間違いない。仏像はインドの仏教が、ギリシア彫刻と邂逅して生まれたというが、ギリシアの神々の像に坐像はないのに、仏教の神々の多くが坐って冥想してござる。これは昔からアジア人が静止のときは坐ることを常とした証明でもあろう。ギリシア人の牧童は立った姿勢が休みになる—そのまま眠ることもある—というが、われわれには立った姿勢は休みにはならない。とりわけ日本人はすぐに坐りたがるので、それで日本の住いの床は板敷であることになったのではあるまいか。要するに「しゃがむ」「坐る」は、われわれアジア人の、そして日本人の伝統的・歴史的姿勢だったことになる。

何のことはない。ダウン族は、ダウンすることで大人と違ったことをして見せているつもりなのだろうが、知らず知らずに先祖の伝統への回帰を見せてくれているわけだ。老高年族が、高度経済成長の時代から一筋に、何とかアジア的伝統から抜け出そうと腐心してきたというのなのである。こう考えると、茶髪にして日本人離れを気取っていても、じつはダウン族こそまさにアジア的伝統を引き継いでくれている貴重な種族だということになる。ゆめゆめ「シッ」などといってはならないのであった。